

2012年後期 江戸の本づくり

第10回 注釈と書き入れの世界 本が成長する

はしぐち 橋口 こうのすけ 侯之介



一度つくられた書物は読者によって再生産される。

和本の場合は、書物が伝えられる過程で、手書きの加工が施されることの意義が重要だ。後の読者が読みやすいように、あるいは理解を助けるために句読点や振りがなほもとより、訓点、注釈、校訂などを書き入れらるのである。それは作者でなく、読者の側の手でおこなわれる。そのために原作のときとは別の意味がますます付与される。今では古書に書き込みがあるといやがられるが、江戸時代までは逆だった。むしろ書き入れをすることで、より成長した書物になる。それが次の読者を呼び、影響力を増すことにつながる。そこに、「伝える」という行為の重要性が理解される。「読む」ということは、たんに文字面を追うことだけでなく、知識や娯楽を共有し、保存し、それを伝えるということまで含むより複合化した広い行為だということである。

注釈、校訂は欧米の書物にもあるが、和本にはさらに複雑な書き入れの世界をもっていた。

注釈とは

漢代から 儒学の經典の注(註とも)をつける = 字句の解釈、訓詁学という方法が発達していた。唐代になると、この注にさらに注をつける疏(シヨともいう)が登場する。清朝まで中国の学問は、この考証学=訓詁と校勘が主であった。

→左:後漢・鄭玄の註。『儀礼鄭注』。さらに江戸時代の漢学者・皆川淇園と思われる詳細な書入がある。

右:『論語注疏』三国時代の魏の何晏(かあん)の註(集解=しっかい)にさらに宋代の学者が註をつけた。

日本でも早く『日本書紀』の校読が行われ、その注記した『日本紀私記』が平安時代の初めにできた。それ以来、中世までの学問と

いえば、注釈をすることだった。

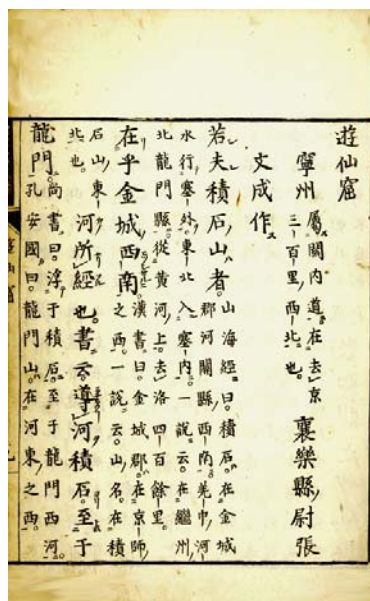
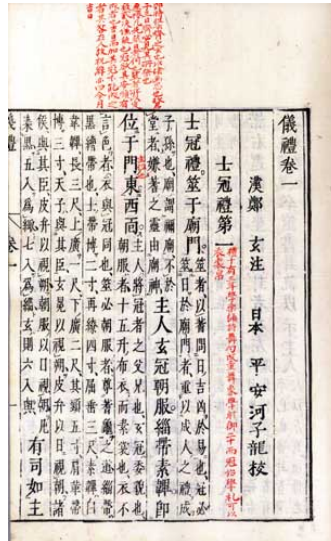
このような注釈本を「抄」といった。抄は抜き書き、手書きのことだが室町期にはカタカナ交じりの注釈本をカナ抄と呼ぶようになった。当時の講義口調がわかる資料にもなる。

中世は、書き入れで対応してきたが、江戸時代に入ると、注釈ごと印刷する。

点・句読点

漢文も平安の物語も本来は、句読点すらない。段落もないことが多い。早くから経

典に区切りや息継ぎがわかるように点を入れる(加点、科点)のをはじめ、しだいに漢文を



中国では失われた唐代の小説『遊仙窟』の江戸初期の翻刻版(和刻本)(左)とそのカナ抄。元禄3年=1690年刊『遊仙窟抄』。本文にも振り仮名がつく(右)。

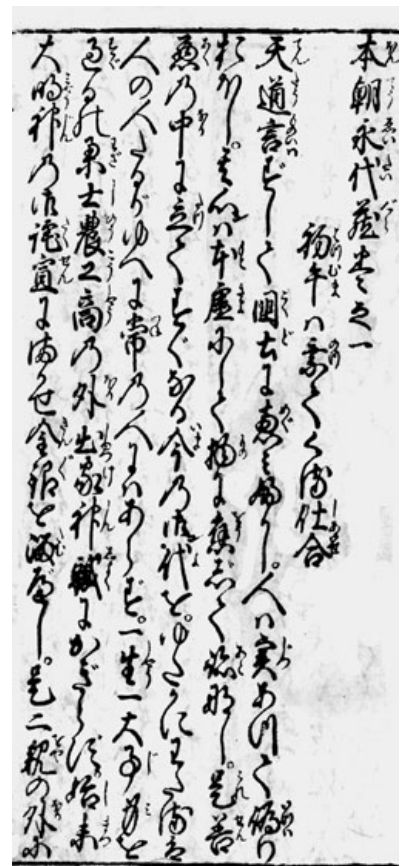
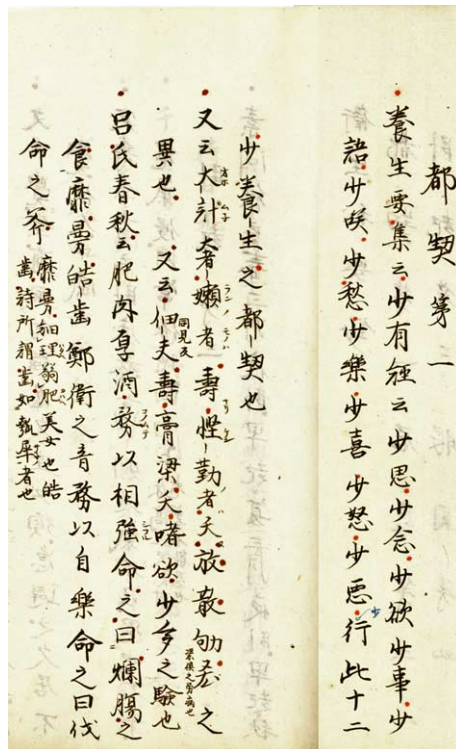
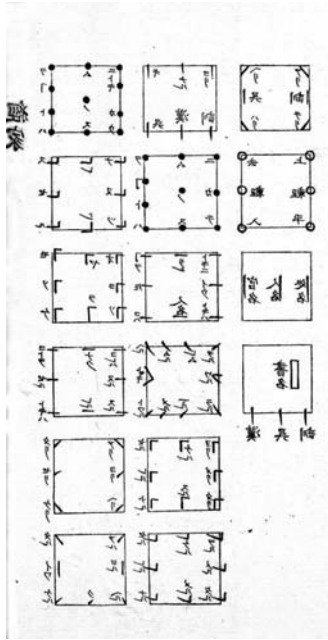
読むための訓点や振りガナをつけはじめる。

句点と読点を区別しないなど、現代とは異なった方法で、決まりがあるようでないのだが、江戸時代の版本にはほとんど入るようになる。

右は西鶴の『日本永代蔵』の巻頭。総ルビで、[.]だけが区切りに入れてある。現代の基本的な活字翻刻本は、この版本の点を見捨て、現代風の句読点に付け替えてしまっているものが多い。

訓点

初期の漢文の訓点はがフコト点（下図右『衛生秘要抄』正応元年(1288)成・延文6年(1361)本奥書本のフコト点）。その方法は家ごとに秘伝とされ（下図左）、標準的ではなかった。現在の二点レ点などを使う方法は室町時代の後半から。



書入のルール

和本の世界では書き込みといわず、書き入れといって、これがあるのはむしろプラスと考える。

和本は頭の部分を少々広くとってあって、そこに書き入れるのである。本文(版面)を囲む罫線(きょうせん)を「郭」といい、その上の欄外を首とか頭と書いてかしらという。ここに注釈(しゆしやく)などを入れるのを頭書(とうしょ)といい、別名鼈頭(かめづら)ともいう。鼈(かめ)というのは中国伝説上の大亀のことである(右図上)。神仙の住む山を背中に乗せて大海を漂うという故事からきている。その鼈の上に乗った鬼を魁(かみ)といい、科擧(かこう)に一番で合格した者(状元)のシンボル(右図下)。先の『遊仙窟抄』は角書に「鼈頭図画」とあり、この頭書部分にカナの注釈を入れ、さらに数丁ごとに挿絵が入る。



校合

そのひとつが、まず校合(きょうごう)である。文字の誤りを正すだけでなく、別の本ではここがこう書かれているという校訂(きょうてい)を入れるのである。一、二字のときは朱(しゆ)を使って、その文字の横に書き加える。誤字脱字(ごじだつじ)も同様に訂正(ていせい)記入(きじり)される。これは、いまの校正記号(ていせいきごう)と同じようなものである。現在の校正(ていせい)の流儀(りゅうぎ)は和本(わほん)時代からの伝統(でんとう)である。

朱引

書き入れにはルールがあつて、やみくもに書けるわけではない。訓点が標準化された室町時代漢文の固有名を区別するための書き入れ方法(朱引)も標準化された。それが歌になっていて、邦書籍朱引法歌「右所、中者人乃名、左官、二者書乃名、左二者年号」といい、文字の右に朱線を引くときは、それが所(地名)であることを示し、文字の中央に乗せて線を入れるは人の名、左側にあれば官職名を、中央の二線は書名を、左側の二重線は年号をあらわす。これは版本に印刷されることはない。

誰が書いたか分からないことが多いのだが、書き入れが多いほど実力のある人が記入した可能性がある。

注釈

元の本に、書き入れをしていくのが、基本的方法。疏のように注釈は注釈を呼ぶ。そのた一定の選択を経て評価された注釈本は、次にその注釈入りが「本文」となる。次の読者は、さ

にそれに注釈を加える。書物は「育つ」のである。『令義解』などは古代の律令本文だけでは平安時代ですらわからなくなっていた。そのための注釈書で、江戸時代にはさらに注釈が必要になり、書き入れで対応した。

中世の学問は、注釈することにあつたといっても過言では無い。その担い手は公家の博士家と多くは仏家だった。恋愛物の『源氏物語』ですら僧侶が注をしている(『紫明抄』)。

しかし、ヲコト点と同じように家ごとの秘伝としてしまうなど閉鎖性もあつた。『古今和歌集』の故実や解釈を秘伝としたのが「古今伝授」で、室町時代の宗祇で最盛期を迎える。その伝授は口伝とその内容を紙片に記しておく「切紙」で伝えられた。

江戸時代に入っても書き入れの手法は盛んで、ほとんどの物之本に入っているほどである。

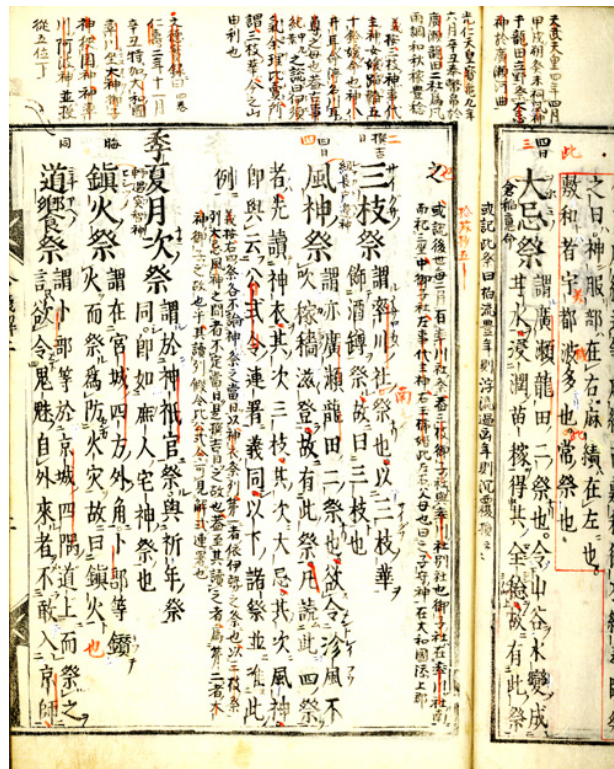
発展応用型

頭書に付録をつけて、子どもたちの好奇心を呼ぶ往来物が盛んになる。本文は決まり切った教科書だが、頭書に付録をつけて板元たちがサービス合戦をした。ここに動物辞典や地理、物知り辞典といった内容を絵入りで入れていく。

講義の要旨は pdf にするので、

http://www.book-seishindo.jp/seikei_tanq/ でダウンロードを。

質問は、専用メールでいつでも。 khashi@s.email.ne.jp



朱引が入り、さらに頭書にびっしりの注釈の書き入れ本。古代の律令を解説した『令義解』(りようのぎげ)。



頭書の絵は本文と関係ない板元のサービス。「頭書絵入寿世江戸往来」